主日礼拝説教

2017.2.26

『姦淫してはならない』

十戒の講解第8回

出エジプト記 20章14節

和泉聖書教会

牧 師　　五十嵐 賢志

旧約聖書　出エジプト記 20章14節

姦淫してはならない。

梗　　概

序

Ⅰ．欲しがるということ

Ⅱ．欲しがるということ

Ⅲ．あきらめないこと

結

序

「姦淫してはならない」

このおきてについて主イエスはこのように言われました。

「『姦淫してはならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」

（マタイ 5:28）

男性と女性とでは、この戒めにあって身につまされるものが違うのではないかと思っております。私は女ではないので、女の方々がどのように情欲をいだくのかわかりません。しかし、男たちは「情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯した」ということばでみな打ちのめされてしまいます。ぐうの音も出ないのです。

前回の「殺してはならない」との関連で見るならば、「殺人」は

私たちに身近ではないし、第一印象として私には関係ないと思えるのですが、「姦淫」の問題はそうではない。性についての罪の意識は絶えず私たちを悩ましてきたし、これからもそうであるのでしょう。私が神学校で学びはじめた頃、当時すでに80歳になろうかとしている老牧師が説教の中でこんなことを言っていたのを印象深く覚えています。

「80歳になっても情欲はあるのですよ」

死ぬまでこの悩みから解放されることはないのだとすると、私たちはこの「姦淫してはならない」という神のことばを前に、ただ罪悪感を持ち続けるだけなのでしょうか。説教は、単に道徳を語るものではなく、慰めがありそこに福音が語られなくてはなりません。いけないことをいけないと言うことはだれにでもできます。やっちゃいけないことをやらずにはおれないから私たちは苦しんでいるのです。その憐れな者たちに語られている慰めとは何なのでしょうか。このおきてに込められている御声に耳を傾けたいと思うのです。

Ⅰ．結婚の尊さ

「姦淫」とは、「当事者の一方または相方において夫婦間の誠実を裏切り、他の異性と性的に関係すること」です。つまり、狭い意味において、或いは本来的なものとしては、相手か自分、その両方が結婚しているときに起こりうることであるということです。

その点で、若い世代における男女の性の悩みについては、ひとまず除外して考えるべきです。身体の成長の変化に伴い異性の身体に興味を持ち、性欲を押さえることが難しかったり、恋愛関係の中で過ちを犯してしまうということは、若者たちにとっては大きな悩み

でしょう。しかし、これらは聖書の中ではことばの上でも「姦淫」とは区別されています。

勿論、主イエスの言われた「情欲をいだいて異性を見ること」は重要です。けれども、この教えは当時の律法学者たちのずるい理解が背景にありました。どういうことかと言うと、例えば、ある男が売春婦のところに行って性的な関係を持つ時に、一夜限り結婚したことにして、帰りに離婚状を置いてくる。「妻を離別する者は、妻に離婚状を与えよ」と律法にあるのだから姦淫ではないとする。こういう屁理屈が横行していたようです。だから、そんなことで姦淫の罪を免れるものではないことを教えるために、主イエスは「情欲」という心の中のことを問題にして見せたのです。

この「情欲」のことについては後で触れますが、まず捉えておくべきこととして、「姦淫」というこの過ちの背後には「結婚」という関係があるということは注目すべき事がらです。

結婚前の男女が思い描く結婚と実際のそれとでは違います。世の恋人たちが思うようにいつでも性的な営みができ満足が得られるというわけではありません。妊娠、出産、子育て、避妊などの家族計画あるいは健康状態によって制限しなくてはならないことが多くあります。また、夫婦の恋愛感情が薄らいでいくと身体の関係は著しく少なくなります。満たされたいという欲求はあるわけですから、夫婦以外の異性にそれを求めるという誘惑は常に起こってきます。

愛の冷めた夫婦関係よりは、自分の気持ちに正直に生きることのほうが美しいことのように見えてしまうことがあるでしょう。それを謳歌する文学やドラマなどで世の中は溢れています。

しかし、私たちの造り主である父は、結婚の約束に生きることの尊さを語っておられるのです。

第五のおきてである「父と母を敬え」には、「主が与えようとして

おられる地で、あなたの齢が長くなるためである」（12節）という約束が付け加えられていました。けれども、この付加された部分は「父と母を敬う」ということに限っているものではないと思います。「殺すな」「姦淫するな」「盗むな」「偽証するな」「欲しがるな」というすべてに当てはまるものです。これらの罪によって、その人の幸いな日々は必ず短くされるのです。

結婚の関係を壊し、家庭を崩壊させるならば、子どもたちの心にも傷を与えてしまい、今だけが楽しければいいという刹那的で悲観主義的な価値観を植えつけることになります。

第一の戒めである「わたしのほかに、ほかの神々があってはならない」について考えたときにも述べましたが、聖書は、ほかの神々を、まことの神と並べて拝むことが姦淫であると言っています。エジプトの神々のもとで奴隷であった者たちが救われて神の民とされたということは、この神と民が結婚の関係に入れられたということなのです。

「あなただけでは、私は満足できない」

と言って、欲望を満たしてくれる神々と淫行にふけり、身を滅ぼしていったのがイスラエルの有様でした。その姦淫の妻を何度も買い戻し、赦し、受け入れたのが主なる神ご自身であり、それを示すために預言者ホセアに、不倫を繰り返す妻を買い戻させたのです。

姦淫の禁止は、夫婦の契りを破り、結婚の麗しさを壊し、家庭を崩壊させるからしてはならないのです。

II．欲しがるということ

さて、結婚関係における狭い意味における「姦淫」について考え

てまいりましたが、主イエスの語られた「情欲」の問題についても掘り下げていかなくてはなりません。

「情欲をいだいて異性を見ること」と、「異性を見て性的な欲求を感じること」とは同じではありません。神は人間が生きるために、また人類が存続するために、必要な欲求を与えておられます。食欲、性欲、睡眠欲の三つがおもに挙げられます。これらはなくてはならないものです。

ですから、「情欲をいだいて」というのは、欲求の満足のみを動機として行うことです。快楽を得ようとすることだけに終始することであると言っていいでしょう。

このように見ていくと、この第七の戒めは最後の戒めに深く関わっているのだとわかります。

「あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」(17節)

この欲しがるということについて、主イエスの兄弟ヤコブは次のように語っています。

「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょう。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。」(ヤコブ 4:1~2)

他人の妻を欲しくなり姦淫を犯し、それをもみ消すためにその女の夫を戦死させた、あのダビデとバテ・シェバの事件はまさにみことばの語るとおりです。

欲しがることのゆえに暴力的であると言えます。芸能界の仕事をしてみないかとスカウトされ、ふたを開けてみるとアダルトビデオへ

の出演で、断ると多額の違約金が発生するからと脅して性的な行為を繰り返してさせ、撮影したことがここ最近たびたび耳にすることです。そこに映し出されているのは見せかけの快楽で、喜びや美しさなど微塵もない暴力行為だったのです。

パウロは、コロサイ人への手紙3章5節でこう言っています。

「不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。」

欲したものを手に入れるために暴力さえも肯定する。そのような貪欲こそが偶像礼拝なのだと言います。

私たちまことの神に見いだされキリストにある救いを経験した者たちは、ただおひとりの神のみを礼拝したいと心から願っています。目に見えて偶像を拝むことはもはやしなくなりました。欲望を満たそうとすることが、すべての必要を満たしてくださる神への裏切りになるのだとしたらどうでしょう。快楽に心を奪われることが神々を拝むことになるのなら、このことが、私たちがこの罪を避けようとする大きな動機付けになるのではないでしょうか。

Ⅲ．あきらめないこと

飽くなき欲求は、何も性的な罪ばかりではありません。ありとあらゆる快楽の追求に、この「姦淫してはならない」というおきては関わりを持っています。そして、それは私たちの心の中で病となって私たちの心を束縛していきます。セックスであれ、ギャンブルであれ、アルコール、薬物から、買い物、ゲーム、スマホに至るまで依存症と呼ばれるものはみなこの類いのものです。そして、ひとたび依存症となれば自分の意志ではそれをやめることができなくなります。キリ

スト者であっても、何かの依存症に陥ってしまうことはありますし、信仰によってそれらから完全に解放されるということは、幻想に過ぎません。信仰があればそのような罪の習慣から抜け出せるはず、という牧師や教会が語ることばは、弱っている人たちに対する暴力です。

それでは、私たちはどうしたらよいのでしょう。

主イエスは、マタイの福音書13章24節から30節で「麦と毒麦のたとえ」をお話になりました。ある人の麦畑に、人々の眠っている間に敵がやって来て毒麦を蒔いたというのです。しもべたちはすぐに抜き集めることを主人に提案しますが、毒麦を集めるうちに麦も抜いてしまうかもしれないから収穫まで待って、最後に麦と毒麦をわけようということにしました。これは、終末について教えたたとえ話です。善いものも生長するけれど、悪も増大するということです。だれが良い麦でだれが毒麦なのかと犯人捜しするのが目的ではありません。そうではなく、私たち一人ひとりの中にも「麦と毒麦」とがあると考えたほうが良いと思います。

「クリスチャンになれば、私の心にある毒麦が抜かれ、誘惑を受けることなどなくなるのでは…」

こういうことは思い違いです。私たちの心の中でキリストのことばが大きくなっていきます。神の義の価値観が育ってまいります。それと同時に悪魔の植えた情欲もまた大きく生長する。これが私たちの今の姿です。

パウロはこう言いました。

「私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」

（ローマ 7:22~23）
あのパウロでさえ、この葛藤に苦しんだのです。
しかし、終わりはあるのです。私の中の毒麦がすべて集められて火で焼かれ、私とはまったく無縁のものとされる時が必ず来るのです。私たちは、自分の中に情欲が起こってきて、飽くなき欲求が猛威をふるうことを経験し、この上もない敗北感を感じます。
「こんなに罪を繰り返してしまうのは、救われていないからだ」
と思うかもしれません。時に、取り返しのつかないと思えるような過ちを犯してしまうこともあるでしょう。しかし、私の中には麦が負けず劣らず生長していることを見落としてはなりません。
「姦淫してはならない」
ということばを聞く度に受ける敗北感ゆえに、気落ちしてはなりません。そして、救いと癒やされることを諦めてはなりません。

結

私たちの主イエスは、姦淫の現場で捕らえられた女が人々から断罪される場でこう言われました。
「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」（ヨハネ 8:7）
そして、一人去り、ふたり去り、すべての人がいなくなってこの女と主イエスのふたりだけになったとき、
「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」（同11節）
と言われました。罪をゆるした上で、「罪を犯すな」と言われるのです。「今からは決して…」というこのことばは、この方が語られた

ことばであるとともに、姦淫を赦された女の決意にもなったはずです。

彼女がその後どうなったのか、聖書は沈黙しています。もう二度とこんなことは繰り返さなかったであろうと思いたいし、おそらくそうであるのだと思います。けれども、万が一に罪を繰り返したとしても、イエスの赦しのことばと「今からは決して罪を犯してはなりません」という声を聞いて、何度でも立ち上がったことでしょう。

「姦淫してはならない」

ということばを前に敗北することの連続ですが、何度ダウンを喫しても、ゴングが鳴るときには必ず立っている者でありたいと願っています。